

令和6年度 第103回全国高校サッカー選手権大会 総評

報告者：高体連技術委員 細田学園高校 上田健爾

令和6年度第103回全国高校サッカー選手権大会が12月28日（開会式・開幕戦）から1月13日（決勝戦）の期間に開催された。決勝戦では90分で決着はつかず、PK戦も10人目までもつれ込む大激戦の末に前橋育英高校（群馬県）が流経大柏高校（千葉県）に競り勝ち、7年ぶり2度目の栄冠を手にした。3位に東福岡高校（福岡県）と東海大相模高校（神奈川県）という結果となった。

来場者数58,347人と過去最高の舞台となった決勝戦は、プレミアリーグ所属チーム同士の対戦となり、両校共に戦術的にも個の力量的にもハイレベルな戦いだった。

ここでは、本県代表の正智深谷高校の戦いぶり、優勝校分析、大会全般の傾向について記していきたい。

（1）本県代表正智深谷高校の戦いぶり

8大会ぶり4度目の出場となった正智深谷高校の1回戦は長崎総科大附属高校（長崎）との対戦となった。基本陣形は1-4-2-3-1。攻撃時は1トップのFW⑩中島を起点に、シャドーのMF⑩近藤が前向きでボールを受け、前進、チャンスを創出する。この日は左サイドにMF⑭小西、右サイドにMF⑨白岩と推進力のあるアタッカーを配置しゴールに迫る。

35分に右サイドからのコーナーキック。DF⑭鹿倉の左足から放たれる正確なキックによってニアサイドでヘディングで合わせ、⑩小西が先制する。

しかし、前半アディショナルタイムに長崎総科大付属の連続した力強い攻撃から、ゴール前にこぼれ、それを打たれ失点し1-1に追いつかれる。

後半に入り、正智深谷高校がボールを握り支配する時間が増える中、52分、アタッキングサードでボールを保持し、⑭鹿倉からMF⑥吉田に鋭い縦パス、そこから⑩近藤へ渡し、バイタルエリアからのシュートがネットを揺らし、再び勝ち越す。

この1点を、DF④佐藤やMF⑤大和田を中心にした堅い守備陣が、相手にゴールを見せず、チャンスを作らせない。相手のサイドからクロスボールでの攻撃もGK①森の安定したクロス対応でボールをキャッチし、1点差を守り切り、2回戦に駒を進めた。

2回戦は東福岡高校（福岡県）との対戦となった。基本陣形はこの日も1-4-2-3-1であったが、⑩中島が右サイドに入り、⑨白岩が1トップでのスタートとなった。

東福岡高校の伝統的なサイド攻撃に対して、SB②外山やDF③岸田の粘り強い1対1の対応や⑤大和田のセカンドボール対しての素早い寄せで、アタッキングサードにボールは運ばれるもののオープンチャンスは作らせない。

後半に入り、右サイドにアジリティー能力の高いMF⑦赤川が入り、右サイドの攻撃が活性化し、正智深谷高校が後半開始10分間で幾度とペナルティエリアに入り込むが決め切れない。

すると、東福岡高校が一気に3名の選手交代を行う。これが形勢を逆転させ、57分に中央を崩され失点する。正智深谷高校も交代で逆転を狙うが、逆に前がかりになったところをひっくり返されアディショナルタイムに再び失点し、2-0となり敗れた。

(2) 優勝校分析

前橋育英高校は1回戦米子北高校(鳥取県)に2対0、2回戦愛工大名電に2対2でPK戦により勝利、3回戦帝京可児高校(岐阜県)に3対2、準々決勝は堀越高校(東京都)に1対0、準決勝は東福岡高校に3対1、決勝戦は流経大柏高校に1対1のPK戦により勝利し、2度目の全国制覇を達成した。決勝は言わずと知れた、大激戦をものにした勝利であったが、1回戦から計6試合すべて熱戦を勝ち取り、優勝を収めた。短期決戦をシードなしの6試合。ましては、接戦の試合を繰り返しての勝利。選手層の厚さを感じた戦いぶりであった。

攻撃時のコンセプトとしては、基本陣形は1-4-4-2。流動性のあるポジショニングによって相手マークを混乱させ、ボールをチーム全体で握り主導権を持つ。FW⑧オノノジュとFW⑮佐藤の強力な2トップが相手DFに恐怖を与え、ゴールを奪う。また、DF③滝口が積極的に攻撃参加し、クロスボールからチャンスを創出していた。

守備時は1-4-4-2のコンパクトな陣形から2トップで誘導を図り、ハイプレスをかける。相手の判断の遅さを見逃さずボールを奪取し、攻撃に転じる。

また、大会中話題となったスーパーサブMF⑦白井をはじめ、オオノノジュが怪我で離脱しても穴を埋め、勝ち上がってくる選手層を持ちあわせていた。

(3) 大会全般の傾向について

大会のトピックスとして3点をあげる。

1点目は【明確なチームカラー】があることである。優勝校前橋育英はボールも人も動くサッカー。流通経済大柏は超ハイプレス。東福岡はサイド攻撃。東海大相模はポゼッションサッカー。と勝ち上がったチームにはそれぞれ明確なコンセプトがあった。近年、コンセプトの構築・浸透が話題に上がるようになってきているが、特に今大会は、それぞれの高校のコンセプト浸透度が上がり、その出し合いが多い大会と感じた。

2点目は【選手層の厚さと戦術の変化】。交代枠5枠になったこともあり、選手の交代が容易になっている近年だが、ここも今大会は有効に利用しているチームが増え、大会までに年間を通じて準備や鍛錬を積んできたことが伺える。東福岡はよく3枚替えをし、劣勢の状況も選手を替えることで優位に持ち込み、ゲームを動かしていたし、前橋育英はスーパーサブを用意し、彼の投入からゲームが動き得点をあげた。また、短期決戦の中、スタートのメンバーを入れ替えるチームもあり、決勝まで勝ち上がるための選手層が必須になってきている。

3点目は【セットプレーの多様性】。今大会もセットプレーから多くの得点が生まれた。

キックの種類。入り方。ゾーンディフェンス対策。ショート。スクリーン。など細部に渡って確認され、より確率が増した。

また、ロングスローについても同様にスローの種類。フェイント。こぼれに対するポジショニング。スクリーンと単調なスローインではなく工夫が見られ、多様化を感じる。

おわりに

大会を通じて、熱量、活気の溢れる試合が多く見る事ができた。また、昨年までの反省からか強度の高い守備への対応、セットプレーの強固な守備への工夫、それぞれのチームのカラーが見ることができた。1年間それぞれが置かれた環境で切磋琢磨し、鍛えられた成果が出ておりハイレベルな試合を見る事ができた。

そして、埼玉県代表の正智深谷高校は全国大会においても個の力量の高さを発揮し、素晴らしいゲームを見せてくれたことを称賛したい。さらに、埼玉から良い選手が育成できるように各チーム切磋琢磨したい。